オイゲン・ヘリゲルの生涯とナチス
——神話としての弓と禅（2）

山田奨治

1　はじめに

ドイツ人哲学者オイゲン・ヘリゲル（Eugen Herrigel　一八八四～一九五五）は、日本の弓道を通して禅をひろく海外へと紹介した人物として知られている。ヘリゲルは一九二四年五月から一九二九年一〇月まで東北帝国大学に奉職し、その間、東北帝国大学弓術部師範であった阿波研造（一八八〇～一九三九）から弓の手ほどきを受けた。その体験をもとに執筆された『弓と禅』[1]は、弓道の手引き書としてのみならず、禅の入門書あるいは日本文化論としても幅広い支持を集めてきた。『弓と禅』は、とくに北米・欧州における日本研究、禅研究、あるいは一般啓蒙レベルで依然として影響力を持ち続けている。

筆者は『弓と禅』で語られたヘリゲルの体験について、いくつかの根本的な疑義を提出し、『弓と禅』の物語がひとつの神話として形成された過程を明らかにした。[2]また、ニールス・ギュールベルク（Niels Gulberg）は、ヘリゲルのハイデルベルクでの日本人留学生との交際や哲学者としての日本での活動について資料の掘り起こしと再評価をおこない、[3]ヘリゲル研究はここ数年間であらたな進展をみせている。しかしながら、ヘリゲルの生涯の全体像のなかで幼少期と来日前後の活動状況、とりわけ戦前・戦中のドイツを支配していた国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）との関連については、いまだ明らかではない。

ヘリゲルのドイツ帰国後の活動について、ゲルショム・ショーレム（Gershom Scholem　一八九七～一九八二）やロドニー・ニーダム（Rodney Needham　一九二三～）といった西欧の文化人たちは、ヘリゲルがナチ党員になったことを指摘している。ショーレム[4]はヘリ

ゲルの元友人の話として、彼が「確信的なナチ」であり、「夫人によって出版された小伝では高い精神的な面についてのみからヘリゲルのイメージが作られており、このこと（ナチ党員であったこと）については触れられていない」と述べている。またニーダム[5]は、「ヘリゲルがエルランゲン大学の教授になった数年後、自主的にナチスに参加した」ことと、戦後、「非ナチ化法廷は彼のナチスへの抵抗が法の要求を満たしておらず、ヘリゲルの免罪申し立てには同意できないと結論づけた」と論じている。しかしニーダムは、その典拠を示さなかった。ツヴァイ・ワーブロウスキー（Zwi Werblowsky 一九二四〜）もまたヘリゲルが「確信的なナチ」で「ヒトラー支持者」だったと語っているが[6]、やはり典拠を示していない。おそらくワーブロウスキーは、ショーレムの記述を参考にしたものと思われる。

ヘリゲルは一九三七年一二月五日にナチスに参加し、ナチスによる教育統制下にあった一九三八〜四四年にエルランゲン大学の副学長を、一九四四〜四五年には学長を務めている。これらの事実は、高度に精神的な禅の紹介者であるヘリゲルのイメージに、おおよそ似つかわしくない。ヘリゲルの著書に添えられている彼の小伝からは、ナチスとの関係を匂わせる部分は一切、削除されている。そのことが、ヘリゲルの生涯の全体像をあいまいなものにしてきた。また死に臨んだヘリゲルが、「もはや死期が近いのを知ると、夫人が制止するのも聞かず、厖大な原稿をことごとく焼却してしまった[7]」といった言説がまことしやかに信じられていたために、誰も残存資料を探求しようとしなかった。

本論文では、筆者がドイツ南部にある複数の文書館から見出した未公刊資料をもとに、ヘリゲルの生涯、とりわけ家族歴と来日前後の活動を解明し、ヘリゲルの生涯の再構成を試みたい。

2　ヘリゲルの生い立ち

一般に流布されているオイゲン・ヘリゲルの経歴は、不完全なものである。とくに帰国後のナチスとの関係をうかがわせる経歴が、意図的に抹消された感がある。この章では、彼の消された経歴を呼び起こすことにする。

よく知られている彼の経歴は、おおよそつぎのようなものである。

- 一八八四年、ハイデルベルク近くのリヒテナウに生まれる。
- 一九〇三年ごろハイデルベルク大学で神学を学び、後にヴィルヘルム・ウィンデルバント（Wilhelm Windelband 一八四八〜一九一五）、エミール・ラスク（Emil Lask 一八七八〜一九一五）、ハインリヒ・リッケルト（Heinrich Rickert 一八六三〜一九三六）から哲学を学んだ。
- 一九一四〜一九一九年、第一次世界大戦に従軍。終戦後、ハイ

デルベルク大学に戻り、私講師として哲学を講義。

・一九二四年五月、東北帝国大学講師として招かれて夫人・アウグスティ[8]（Augusty　一八八七～一九七四）とともに来日、哲学の講義を担当するとともに阿波研造範士から弓術を学ぶ。

・一九二九年八月、帰国してエルランゲン大学正教授となる。

・一九五一年、第二次大戦終戦後、エルランゲンを引き揚げガルミッシュ・パルテンキルヒェンで隠棲。

・一九五五年春、肺癌で死亡。

彼の生涯のなかでもっとも重要な時期は、一九二四～二九年の来日とその前後であろう。来日中の弓術修行により、禅の神髄に到達したとされる事情については『弓と禅』で語られており、そこから霊感を得た多くの著者による論考がすでにある。しかし、ヘリゲルが来日するに到った事情や帰国後の活動については、ほとんど何も情報がない。そこでハイデルベルク大学にある未公刊資料[9]から、彼の略歴の行間を埋めてみる。

オイゲン・ヘリゲルは、一八八四年三月二〇日にハイデルベルク近くのリヒテナウで生まれた。父の名はゴットローブ（Gottlob　一八五〇～一九二六）、母の名はヨハン（Johann　一八五〇～一九一五）であった。兄弟はオイゲンのほかに、オスカー（Oskar　一八七四～一九三四）、ヘルマン（Hermann　一八七六～一九三二[10]）、エンマ（Emma　一八七八～一九四六）、フリードリッヒ（Friedrich　一八八〇～八六）、エルザ（Else　一八八七～一九七七）、ヘドウィック（Hedwig　一八九四～一九六三）の七人兄弟（フリードリッヒは幼没のため、実質は六人兄弟）であった。

父のゴットローブは教育者にしてオルガン奏者であった。オイゲンが生まれた当時、ゴットローブはリヒテナウの学校で教頭をしていた。オイゲンが生まれてまもなく、転勤により一家でハイデルベルクのフィロゾーフェン・ウェグ（Philosophenweg）六番地に転居した。緑に囲まれた小高い場所にある二階建ての邸宅で、オイゲンは幼少期から来日前までをこの邸宅で過ごした可能性がたかい。オイゲンの妹エルザの回想録には、オオエという名前の日本人がオイゲンを訪ねて家によく来ていたと書かれている。

ゴットローブはオルガン奏者としての名声もたかく、ハイデルベルク中心部の聖霊教会（Heiliggeist-kirche）でもたびたび演奏をした。聖霊教会に大切な客人があるときには、ゴットローブに演奏の依頼がきたという。また物語集の出版もした[11]。ゴットローブは六五歳（一九一五）で引退したあと、ハイデルベルクの自宅に日本人やフランス人、イギリス人などの留学生を下宿させて教育をしていた。オイゲンはここで日本人と接触を持っていたと考えられるが、その日本人が誰であるかは特定できない。

務台理作[12]（一八九〇～一九七四）は、オイゲン来日中の一九二六

写真1　ハイデルベルクにある旧ヘリゲル邸跡地　ヘリゲルは青年期までをこのあたりで過ごした。現在はハイデルベルク大学物理学研究所の駐車場になっている。(2000年著者撮影)

年四〜九月に、当時ハイデルベルクに留学していた高橋里美[13]（一八八六〜一九六四）の仲介で、ヘリゲルの実家に下宿した。務台はヘリゲル邸付近の印象を「ちょうどフリーダの花が咲き、カスタニエンの花が咲き、果樹園の桜ん坊の花が咲き、西洋藤の花房があまくにおい、花という花の咲きそろう一年中の一ばん美しい時節である。田舎の小都会としてまだまだ多い生垣に黒つぐみがいい声で啼いていた」と回想している[14]。

一九二六年九月に務台は、ハイデルベルクからフライブルクのエドモント・フッサール（Edmund Husserl　一八五九〜一九三八）の許へ移った。ゴットローブの死は同年八月三一日である。務台は彼の葬儀を見届けてからハイデルベルクを後にしたのだろう。

ゴットローブの死後、ハイデルベルクの邸宅はある大学教授に転売され、戦争によって廃墟となった。ヘリゲル邸があった場所は現在、ハイデルベルク大学物理学研究所の駐車場になっている（写真1）。往事の庭園跡と見られる場所に、わずかに煉瓦積みの痕跡を残している。

ゴットローブの長男・オスカーは牧師であった。オスカーは東洋の言語とエスペラントを操り、アルブレヒト・トーマ（Albrecht Thoma　生没年不明）に関する本[15]を書き、ヨハネス・ケプラー（Johannes Keplerr　一五七一〜一六三〇）の伝記を新聞に連載した。またカールスルーエのギムナジウム教師として宗教、ドイツ語、歴史、フランス語を教授した。

二男のヘルマンも牧師としての道を歩み、グタハの主任司祭牧師をつとめた。ヘリゲル家の教育的で宗教的な雰囲気は、オイゲンの進路と思想におおきな影響を与えたであろう。

長女のエンマはフランス語の教師で、フランス語の学習書[16]を出版している。

三男であったオイゲンは、ハイデルベルクの国民学校とギムナジウムで学び、一九〇三年にギムナジウム卒業資格を得た。ハイデルベルク大学に進み、一九〇七〜八年に神学を、一九〇八〜一三年に新カント派の哲学を学んだ。一九一三年、ウィンデルバントのもとで博士号を取得し、ラスクと交際した。一九一四〜一六年に戦場で

衛生兵として働き、一九一七～一八年に帝国行政委員と軍兵監部の代表委員になった。一九二三年、リッケルトのもとで大学教授資格を得た。同時に大峡秀榮（一八八三～一九四六）とアウグスト・ファウスト（August Faust　一八九五～一九四五）による禅のアンソロジー[17]の校訂を手伝った。

日本から帰国後の一九二九年、オイゲンはエルランゲン大学で哲学の正教授になった。一九三六～三八年、哲学部長を務める。その間、一九三七年一二月五日（同年五月一日付）、ナチ党員となる。党員番号は五四九九三三二。そして一九三八～四四年に副学長、一九四一年にバイエルン科学アカデミーの正会員、一九四四～四五年にはエルランゲン大学学長となる。終戦後は一九四五年五月三一日付で副学長に、一九四六年一月一四日付で正教授にそれぞれ降格され、一九四八年に引退した。

また、日本ではあまり知られていない、つぎのような論文がある。

- 「新帝国での哲学の課題」一九三四年[18]
- 「国家社会主義と哲学」一九三五年[19]
- 「日本民族の伝統と文化生活」一九四一年[20]
- 「サムライのエトス」一九四四年[21]

なお、筆者が先行論文[2]で問題としたヘリゲルの日本語能力について、彼が一九四三年九月一五日にニュルンベルク大管区学校教育省の地区長に提出した書類で「わたしの日本語会話能力はとても低く、読み書きの知識はない」と明言している。

オイゲンの妻・アウグスティは来日中に生花を修業し、『生花の道』[22]という本を書いたことで知られている。筆者の調査によるとアウグスティは二度目の妻である。この事実は、これまでまったく知られていなかった。オイゲンの最初の妻はバロネッセ＝パウラ（Baronesse Paula　一八九三～一九二四）という女性で、オイゲンに連れ添って仙台に来ている。しかも来日時にすでに身重であった。バロネッセは来日から三ヶ月にも満たない一九二四年八月八日に、仙台で女子を出産した。死産であった。女子にはウラ（Ulla）という名前が贈られた。ハイデルベルクからの長旅のせいであったのだろうか、五日後の一三日にバロネッセもこの世を去った。アウグスティと再婚したのは、一九二五年九月一六日である。仙台市に同日付の婚姻届が出されている。したがって、ヘリゲルの経歴のなかで「招かれて東北帝国大学講師として、夫人グスティ（Gusty）とともに来日[23]」と紹介されてきた部分は誤りであることになる。ヘリゲルは前妻や日本で亡くした娘のことについて何も語っていない。おそらく心の奥に秘めたことであったのだろう。オイゲン、バロネッセとともに石原謙[24]（一八八二～一九七六）が写っている写真が、ハイデルベルク大学に残されている。この悲しい出来事は来日直後のこ

とであったので、日本での彼の友人たちのなかでそれを知り得る立場にあった人は、わずかであったと思われる。

オイゲン・ヘリゲルの経歴のなかでもっとも重要なことは、エルランゲン大学の学長になったことである。帰国後に同大学の教授になったことはよく知られている。しかし個人の経歴として見た場合、教授になったことよりも学長になったことのほうが、はるかに価値があろう。しかし、学長になったことは、現在流布しているすべてのヘリゲルの著書における著者紹介からは抹消されている。その理由は、学長になった一九四四～四五年という時期が、ナチスとの関連性を疑わせるからである。

ヘリゲルに関する記録から、ナチスや戦争との関係を連想させる部分が削除された具体例をあげよう。『禅の道』[25]初版の冒頭にはヘリゲルの死亡新聞記事が転載されている。そこには彼がエルランゲン大学の学長になったこと、彼の行動が町を破壊から守ったことが述べられている。つまり記事からは、ヘリゲルがナチ政権下にあって学長であったことと、エルランゲンの管轄において責任ある立場であったことが見てとれる。ところがこの死亡記事は、どういうわけか『禅の道』第二版（一九六四年）以後、削除されてしまった。同書の英訳・邦訳とも初版を底本としなかったためか、死亡記事は封印された形になってしまった。

『禅の道』死亡記事の一件に見られるように、ヘリゲルとナチスにまつわるすべての情報が、翻訳者・出版者らの手によってことごとく隠された。高度に精神的な禅の体得者であり紹介者であるはずのヘリゲルが、ナチスに関わったという事実は、あまり紹介したくないことであったに違いない。この隠蔽は誰かが指示したというものではないだろう。ショーレムが指摘したように[4]、精神的な人としてのヘリゲルのイメージを形成するための、暗黙の共通意志が働いたものといってよいだろう。

3　ハイデルベルクでの日本人との交流

この章では、ギュールベルクの引用文献に加えて、ヘリゲルの同僚であったヘルマン・グロックナー（Hermann Glockner　一八九六～一九七九）とファウストによる回想をもとに、ヘリゲルの禅との接触について述べる。ギュールベルクは、天野貞祐[26]（一八八四～一九八〇）、石原謙、北昤吉[27]（一八八五～一九六一）、三木清[28]（一八九七～一九四五）といった学者とヘリゲルが、ハイデルベルクで親しく交際したことを示す回想文を発掘した[3]。ヘリゲルは日本に来て禅を学んだという通俗的理解に反して、ハイデルベルク時代に日本人留学生との交際のなかで、彼は禅に関する相当な知識を得ていたことを明らかにする。

三木清は一九二二～二五年の間、ドイツに留学した。当時のドイツはインフレ下にあり、日本からの留学生はみな裕福な留学生活を

送ることができた。欲しい本が買え、ハイデルベルク大学の教員たちを家庭教師に雇って個人教授を受けた。日本人留学生がハイデルベルクの教員を経済的に支えるという構図さえもあった。

三木は、「幸ひなことに――この言葉はここでは少し妙な意味をもつてゐる――私はまた当時思ふ存分に本を買ふことができた。ドイツにおけるあの歴史的なインフレーションのおかげで私たちは思ひ掛けなく一時千万長者の経験をすることができたのである[29]」「私はホフマン教授の論文を訳して『思想』に載せたことがある。当時ドイツのインテリゲンチャはインフレーションのために生活が窮迫してゐたので、いくらかでも原稿料が入れば宜しからうと思つて、私はその論文を教授に依頼したのであつた。そんな状態であつたので若いドクトル連中は皆喜んで日本人のために個人教授をした[30]」と回想している。三木に個人教授した学者は、ヘリゲルのほかに、グロックナー、カール・マンハイム（Karl Mannheim　一八九三～一九四七）らである。ヘリゲルは三木にエミール・ラスクの哲学を講義した。

三木がハイデルベルクで知り合った日本人に、阿部次郎[31]（一八八三～一九五九）、天野貞祐、石原謙、大内兵衛[32]（一八八八～一九八〇）、大峡秀榮、小尾範治（生没年不明）、北昤吉、九鬼周造（一八八八～一九四一）、久留間鮫造[33]（一八九三～一九八二）、黒正厳[34]（一八九五～一九四九）、鈴木宗忠[35]（一八八一～一九六三）、成瀬無極[36]（一八八四～一九五八）、羽仁五郎（一九〇一～一九八三）、藤田敬三（生没年不明）らがいる。これらのひとびとはみな個人で、あるいは数名のグループを組んで、ハイデルベルクの教授や若手講師を家庭教師として雇っていた。三木によると、ヘリゲルはその頃にハイデルベルクに哲学を学びにきていた日本人留学生の中心的存在で、大峡や北の下宿でヘリゲルを囲んだ読書会が開かれていた[37]。ヘリゲルは、日本および日本人のイメージをこれらの留学生を通して形成した。

一九二一～二三年ころまでハイデルベルクに滞在した石原は、「私のゐた頃には、後にフランクフルトの教授になつたマンハイムや、日本に来たヘリゲルや、ファウストや、あるゲマィンデの牧師等も出席して神秘主義の研究をしてゐた[38]」と述べている。神秘主義とは、マイスター・エックハルト（Meister Eckhart　一二六〇頃～一三二七）のドイツ神秘主義を指す。ヘリゲルは学生のころより神秘主義に傾倒し、学究をすすめた。しかしそれを理解するためには、彼自身、何かが欠けていることを悟っていた。そのような状況のなかで、ヘリゲルは日本人留学生たちと接触した。なかでも日本人たちが語る「禅」に、ドイツ神秘主義を深く理解するための鍵を見出した。

ヘリゲルは日本に来て阿波から弓術を教えられる過程で、禅を理解したとする通説は誤りである。筆者が先行論文[2]で明らかにしたように、阿波は彼独自の特異な思想について語ったのであって、禅に

ついては必ずしも肯定をしていない。それにもかかわらずヘリゲルが阿波の言葉から禅を見出したということは、ヘリゲルが阿波から教わる時点で、すでに禅に関する知識を相当持っていたことを意味する。

ヘリゲルに禅を教えるうえでおおきな役割を果たした人物は、ハイデルベルクの日本人留学生、大峡（大巌）秀榮である。大峡については未解明の部分が多く、その生涯も謎である。一八八三年に山形県に生まれ、一九〇四年に第二高等学校、一九〇七年に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した後、茨城県立土浦中学校教諭、新潟医学専門学校教授、明治専門学校教授などを経て、一九二一～二三年の間、文部省の命で倫理学と教育学の研究のためドイツに派遣された。帰国後は大正東文科学院教授、成蹊高等学校教頭などを歴任した。一方で大峡は臨済宗に近い居士でもあり、択木寮という禅道場を創設したとされる。ハイデルベルク滞在中には、ファウストとともに禅のアンソロジーを出版している。先にも述べたように、ヘリゲルはその校訂を手伝った。[37]

大峡は釈宗演（一八六〇～一九一九）の弟子である釈宗活（一八七〇～一九五四）に師事した。釈宗演は、鈴木大拙（一八七〇～一九六六）の師として名高い。エルンスト・ベンツ（Ernst Benz　一九〇七～一九七八）は大峡を「一九四二年頃のその死にいたるまで臨済宗居士団の宗教的指導者として活躍した」[39]と紹介している。さらにベンツは、ヘリゲルを大峡の弟子と位置づけた。

大峡とともに禅のアンソロジーを出版したファウストとの思い出について、グロックナーは、『ハイデルベルク絵本』[40]という本のなかで触れている。グロックナーとファウストの関係について、一九二三～二四年の間ハイデルベルクに滞在した天野は、「二四年にヘリゲルはわが東北帝国大学へ赴任したが、グロックネル、ファウストの二氏はリッケルトの家に同居し、ホフマンは近く住み、日夕往来するばかりでなく、古典の共同研究をもしてゐた」といっている。[41]

グロックナーは『ハイデルベルク絵本』のなかで、大峡との最初の出会いについて、つぎのように述べている。

> 一人の、もう全然若いとはいえない、そしてその挙動が古くさくて儀式ばった、宗教界のある偉者が日本から何人かの取り巻きを伴ってハイデルベルクにやって来たが、彼はたちまちのうちに同じような思想をもつ同国人のグループの中心的人物になってしまった。それらの人々はみな哲学に興味を持ち、出来たらリッケルトのゼミに入れてもらいたい、それが駄目ならせめて彼の講義に出席してそれを理解したい、ということで、一所懸命勉強していた。

禅学研究者のロバート・シャーフ（Robert H. Sharf）は、西洋に

禅をひろめるのに関わった人物に共通する特徴として、正統な老師としての訓練と資格を欠き、日本の禅教団のなかでは周辺の位置にあった者であることを指摘している。[42] 大峡の場合もその例外ではない。大峡の取り巻きは、リッケルトに大峡のことを「仏陀から数えて第七十九代目にあたる高位の禅宗の僧侶[40]」であると紹介した。ファウストも、その当時の大峡はすでに臨済宗の中で高位にあって、「当時の管長の後継者に決まっていた[43]」と理解していた。ところが大峡は僧侶ではなく居士であって、臨済宗管長の後継者でもなんでもなかった。

グロックナー[40]によると、日本人には興味を示さなかったホフマンとは対照的に、「ヘリゲルはオオハザマとの交際が全く運命づけられていたようなもの」であった。そして「二人はウマが合って、ほとんど一目見た時から友人になり、普通以上に大金を持っていたオオハザマはヘリゲルを休暇中のドイツ国内の大旅行に同行するよう招待しただけではなく、一九二四年には仙台の東北帝国大学教授の席を世話し」た。グロックナーはこのように書いているが、大峡と東北帝国大学の接点は、彼が二高を卒業したということ以外には見あたらず、教授の席を世話できる立場にあったという状況証拠はない。

「オオハザマは確かに変わり者だが、尊敬すべき人物であった」とグロックナーはいう。茨城県立土浦中学校教諭時代の同僚で、大峡とは兄弟にも優る親交を続けてきたという北も、大峡の人格を賞賛している。北によると大峡は下宿の主婦からは「天より使はされた人」、牧師からは「基督教徒の典型」と呼ばれるほど宗教的な人であった。大峡は日本の留学生は為替成金で裕福なのだから、周囲のドイツ人に親切にして生活の快を分かとうと提案し、「附近の子供等の為めに、常にチョコレートをポッケットに用意し、一片の肉も主婦と子供等に分ち、又子供等の望みに応じて彼等を自動車にまで乗せて、其の嬉々たる様を見て、我が子の如く喜んでゐた[44]」という。

北と大峡は二人で、週に一、二度、数名の大学講師や主婦を集めて歓談の夜会を催した。ヘリゲルはこの会の常連であった。一九二二年六月に北は、リッケルトの依頼で禅についての講演をした。その講演文章の訂正をヘリゲルに依頼した。「所が文章の訂正に取りかゝつたヘリゲル君自身も、本来の神秘的傾向から、感激を以て共鳴して来た」「禅の方法は観照と実行とを特殊の方法にて一致せしめるにあると説いた」「演習としてはかゝる例は絶無であるとは列席せるヘリゲル博士の言であつた」と北は回想している。[45] これらの証言が物語っているように、ヘリゲルは大峡に加えて北からも禅に関する知識を得ていたのである。

ヘリゲルが大峡らから禅に関する直接的な影響を受けたことを示す証拠がある。ヘリゲルは日本の禅を「生きた仏教」（"lebendigen" Buddhismus）と表現した。[46] この「生きた仏教」という表現は、大

峡とファウストの書『禅　日本の生きた仏教』(ZEN Der lebendige Buddhismus in Japan)[47]から取ったものだろう。

北はヘリゲルに東北帝国大学の職を周旋したいきさつについても述べている。

ヘリゲル君の日本来朝には、種々の理由があつた。同君は大戦勃発と共に、主計として司令部附き対仏戦線に出たが、久しい従軍の為に肺炎に罹つて身体をこはしたが、幸ひ敵弾には見舞はれずに講和成立後の軍隊解散の残務の為めに長く服役を続けて、結局六年近くも学窓を遠ざかつてゐた。同君が学位を獲たのは戦前であつたが、私講師となつたのは、私のハイデルベルヒ滞在中であつた。同君は恩師のラスクは戦没したし、六年も勉強はやらなかつたし、私講師生活も悲惨であつたし、日本人に多くの友達が出來て、日本が夢の国になりかけたので、是非日本へ來て、静かに自分の体系も立て、且つ独逸哲学を日本で講義したいとの希望であつた。折柄、独逸来遊中であつた沢柳博士が我々から此の話しを耳にして、例の義侠心でヘリゲル君のことを引き受けて、東北大学へ周旋したものである。[47]

一方でファウストは、ヘリゲルに対して厳しい見方をしている。ヘリゲルの人間性を非難しているといってもいいだろう。たとえば、ファウストはつぎのようなことをグロックナーに話している。[40]

ファウストがいうには、ヘリゲルは実はその半分の価値しかないのにオオハザマの全幅の信頼をかち得ているという。というのも結局のところヘリゲルは、リッケルト夫妻を丸め込んだのと同じように日本人たちをも丸め込み、利用しているからだそうだ。「ヘリゲルはありとあらゆるものをセンセーショナルに仕立てるのです。すべてのものをあのオオハザマが深い印象を受けるように仕立てるのです。でも実をいうとあの中年の男もまったくおなじようにしたいのですよ。彼自身もそういう扇動者なのですからね。結局のところ、ふたりはお互い同士でもリッケルトとやっているようにお芝居をやっているのです。リッケルトは散歩の時に、一方の人の茶番劇も他の人の茶番劇もまた私に演じてみせてもう一度最高に面白がっているのです。そしてしかるべきチャンスがあればあなたにもおなじようにするでしょうよ。生まれつきの役者ですよ、あの三人は。でもオオハザマが邪気のない喜劇役者だということは、あなたも今日御自分の目でしかとご覧になったでしょう。リッケルトもまた、非常に才能のある人間によくあるように、どこかおおきな子供みたいなところがあるのです。でもヘリゲルはそれとは全く反対です。こういうことを言えば、あなたには個人的中傷と聞こ

えるかも知れないのですが、ヘリゲルは全然子供っぽいところもなく、また無邪気でもないのです。彼がお芝居をするとすれば、実をいうと彼は絶えずお芝居をしているのですが、その効果をちゃんと正確に計算しているのです。それに私は腹を立てているんですよ」

グロックナーもこのファウストの意見に賛成した。ファウストはさらにヘリゲル非難を続ける。

例のヘリゲルがもう何年も前から、あの禅の僧正と同じように、リッケルトに話の種をたくさん提供出来たのをみると、もう大山師カリオストロとその一味を思いだしてしまいますよ。ヘリゲルが、戦争中の外科病棟のことでどんな作り話をこさえたか、リッケルト教授はもうあなたに話されましたか。ヘリゲルがライバルに自分との決闘を思いとどまらせるために、どのようにして一〇メートル離れたところから一番小さな小石をピストルで狙って命中させたかという話をもうしてくれましたか。まるでアレクサンドル・デュマの小説でも読んでいるようにですよ。そしてこのほらふき男は哲学の分野でもそれを華々しくやってみようとしているんですよ。

ファウストは大峡とともに本を作ることについて「私個人としては、何かセンセーショナルなものをするためでは絶対にないと言ってよいと思います。私は一体『禅』とは何なのかちゃんと探ってみたいのです」と、あくまでも真摯な態度で禅を探求するためだという。さらにファウストは、「ヘリゲルがそういう厄介で献身的な仕事を引き受けることなど絶対にないはずです。彼には禅があまり明らかになっては困るからです。あいまいなままでなければならないのです。というのは、彼はこのあいまいさを利用しようとしているからです。お分かりになりますか」と続ける。

ヘリゲルとファウストはおなじリッケルト門下にあって、ライバル関係にあった。したがってファウストのいうことは、ヘリゲルに敵意を持つ者の言葉だという点を割り引いて受け取らなければならない。しかしヘリゲルを知る者のなかには、ファウストのような見方もあったという事実は消せない。ファウストが編集した禅の本は、彼がいうとおり生真面目なアンソロジーである。それに対してヘリゲルがその後の訪日を経て紹介した禅は、知の世界にセンセーションを巻き起こした。ファウストが危惧したとおり、結果としてヘリゲルは西欧世界からみた禅のあいまいさから最大限の恩恵を受けた。ヘリゲルの本は世界中にひろまったが、ファウストの真面目な仕事は歴史のなかで忘れ去られた。

4　ドイツ帰国後の活動とナチ党

ヘリゲル帰国から四年後の一九三三年、ヒトラーがドイツの政権を掌握した。同年七月には、大学の講義はナチ式の敬礼から始められるようになった。エルランゲン大学には、ヘリゲルが「ドイツ帝国と民族の指導者であるアドルフ・ヒトラーに忠誠と服従」を誓った、一九三四年八月二〇日付の文書がある。この日はヒトラーが首相と大統領を兼ねた総統となった翌日にあたる。

一九三四年一二月一三日には帝国文部省令「大学教授資格授与規定」が出され、大学教授資格取得の条件として当人のナチ世界観と国家への忠誠が審査されるようになった。一九三五年四月一日の帝国文部省令「大学管理の統一化の指針」は、大学内のあらゆる地位の任命権を帝国文相に一元化し、一九三七年の「ドイツ公務員法」は、国家に忠誠を示さない公務員を州の首長の命令によって休職処分とすることを可能にした。

山本尤のまとめによると、一九三三年当初のドイツの全大学教員七七五八名のうち、一九三三〜三八年までに大学を去った者の数は三一一二〇名にのぼる。[48] このようにナチスによる大学管理が徹底していくなかで、ヘリゲルは一九三六年にエルランゲン大学哲学部長、一九三八年に副学長と昇進していったことは、注目に値する。

ハイデルベルク大学が所蔵するヘリゲルに関する未公刊資料のなかに、終戦後にヘリゲル自身がナチスとの関係について弁明した文書のオリジナル（以後、「弁明文」とする。付録参照）がある。終戦後、ナチ政権下で公職にあった者はすべて、自らのナチスとの関係について弁明する必要があった。この「弁明文」もそのような一連の文脈のなかで書かれたものであろう。執筆時期は、付属文書の日付から一九四七年三〜一一月の間と推定できる。「弁明文」は戦後、自らの罪を逃れるために弁明をした文書であることを割り引いても、ヘリゲルとナチスとの関係を解明する一級の資料であると評価してよいだろう。

ヘリゲルによる「弁明文」の概略を紹介しよう。

> 戦争の最後の五ヶ月間、エルランゲン大学学長だったという事実が、わたしをグループII（行動主義者、軍国主義者、受益者）に組み入れようとしている。わたしはこの法的憶測が、わたしには当てはまらないという証明を提出することができる。
>
> このような前書きから始まる「弁明文」は、以降、Iどのようにしてわたしは学長になったのか、IIどのようにしてわたしは学長としての職を務めたか、III戦争最後の何ヶ月間かの学長としてのわたしの態度は、一九三三から四五年までのわたしの全般的態度と一致する、IV占領軍政府との共同作業、という章立てで組み立てられた

A四判六頁にタイプされた文書に続いて、その弁明を裏付ける二一名の証言者（うち一名分の証言が欠落）による署名入りの証言が添付されている。

ヘリゲルはまず学長になった経緯について、帝国文部大臣ベルンハルト・ルスト（Bernhard Rust　一八八三～一九四五）の命令によって前任の学長ヘルマン・ヴィンツ（Hermann Wintz　一八八七～一九四七）が解職され、同時に自分が後任に任命されたことを驚きを持って受け入れたと述べている。なぜならば、その頃のヘリゲルは「ただの一時的な党員でしかなかったし（党員証なし）」、当時のバイエルン地方の学長選任方式によれば大管区大学教官同盟長、中管区長、大管区長の意見を入れるのが通常であったからである。また入党したのは志願したからではなく、一九三七年の秋に要請されてのことだった。入党を拒否しなかったのは、もし拒否したら「大学にとって非常に都合の悪い結果」になるからだった。ヘリゲルが学長になることを決心したのは、もし自分が学長を断れば中管区長や大管区大学教官同盟長のいいなりになる人物が学長になると判断したからで、決して「名誉欲あるいは顕揚欲を満たすために」学長になったのではないと強調する。

戦争中、エルランゲンは二五〇〇～三〇〇〇人規模の難民受け入れを三度にわたって要求された。大量の難民受け入れは大学の閉鎖を意味する。ヘリゲルは学長として大学を守るためにそれら難民の受け入れをことごとく拒否した。おかげでエルランゲン大学は守られたが、ヘリゲルは「このたいへんな苦難の時期に、同人種に対して心ないインテリだ」という非難を受けた。

終戦間際、徹底抗戦を唱える中管区長、グロス（Gross）を打倒するために、陸軍中佐のハンス・リッター・フォン・シュミット（Hans Ritter von Schmidt）と謀議をしたが、フォン・シュミットが秘密国家警察に逮捕されて謀議は失敗した。もしアメリカ軍による占領が数週間遅かったら、自分の身も危険にさらされていたであろうことを述べている。そして「わたしは『行動主義者』ではあったが、ヒトラー賛成派ではなく反対派だった」としている。

ナチ・イデオロギーとユダヤ人に対する態度について、ヘリゲルはこう弁明している。

- 自分の家庭医はユダヤ人医師であった
- 一九三四年一月にユダヤ人学生に最高点成績で学位を授与した
- 一九四二年にユダヤ人混血人に学生許可を与え、経済的支援もした
- ユダヤ人の本を哲学ゼミ図書館から処分しなかった
- 講義と演習でユダヤ人哲学者の教えも扱った
- 国家試験でナチ世界観の審査をしなかった

そして、「わたしの講義と演習中、わたしは客観的な立場にいることに努め、ナチのイデオロギーにはすこしも居場所と感化の余地を与えなかった」としている。戦後は占領軍によく協力し、彼らの信頼を得たと述べている。

以上がヘリゲルの「弁明文」の概略である。

この弁明は、つぎの二点において問題を含んでいる。

第一に、学長任命時のヘリゲルは、「ただの一時的な党員でしかなかったし（党員証なし）」と述べている。しかしこの弁明には疑問がある。ドイツ連邦公文書館に収蔵されている旧ベルリン・ドキュメントセンター資料には、ヘリゲルのナチ党員証の写しが存在する。党員証の日付は、ヘリゲルがいうように一九三七年一二月五日（ただし入党は同年五月一日付）である。また、エルランゲン大学には、ヘリゲルがナチ党員証を所持していることを当時の学長に報告した一九三八年一〇月一三日付の署名入り文書も残されている。これらをどのように理解すればよいのだろうか。当時の状況下で党員登録は、大学の人事を含めすべての面において有利に作用したはずである。登録が一時的なものであるかないか、本人が知らないということは考えにくい。ヘリゲルは党員になったことも学長になったことも、自分のためではなく大学のためであったと繰り返している。しかし党員になったことが彼の「出世」を助けたことは、動かしがたい事実である。

第二に、大量の難民受け入れを三度拒否したことに関する人道上の問題である。これによってヘリゲルは「心ないインテリ」と非難された。現代的な感覚からみても、戦災にあった同国民の受け入れを拒否することは人道上、問題であろう。また彼が傾倒した仏教の教えにも反する。大学という学問の場を守ったのだという彼の言い分には、どれほどの意味があるだろうか。

ヘリゲルのライバルであったファウストも、ナチ党加担者の例外ではなかった。ファウストの場合はヘリゲルよりも急進的であった。天野は「ナチスの出現はドイツの国情を一変させてしまったが、この親密な学者の平和な集団にまでもその波動を及ぼさずにはおかなかった。ホフマンのやや自由な考方とファウストのあまりにも国民的な考方とは到底和協をゆるさなかった」[41]と回想している。ファウストも一九三七年以来のナチ党員で、同年二月一九日のバーデン大管区指導部が彼について書いているところによると、「ナチ革命以後、ファウストは直ちにこの運動内部で積極的に活動し、ナチ大学教師同盟の専門部会長およびヒトラー・ユーゲントの社会問題担当官を務め、彼の信頼できる出撃準備と協力は、党事務局から無条件に評価されている」[49]とある。そしてファウストはナチス・ドイツの末期に自殺を遂げた。

一九四七年一二月にエルランゲンの非ナチ化法廷は、ヘリゲルが

国民社会主義に心から染まっていたわけではないと認めた一方で、ヘリゲルが示したナチへの抵抗は、彼を無罪にするほど十分なものではないとし、彼を「消極的な同調者（Mitläufer）」と認定した。ハイデルベルク大学に、その裁判記録のオリジナルがある。逆説的にいうならば、このような弁明をしなければならなかったこと自体が、ヘリゲルのナチスへの関与を明確に証明しているともいえる。

占領軍による非ナチ化は、一九四八年三月に一応終了したとされる。ヘリゲルのことは、非ナチ化の最終段階での処分であった。戦争犯罪者の処分は、その地区をどの国の占領軍が治めたかによって厳しさが異なっていた。山本によると、エルランゲンのようなアメリカ軍占領地区では、重罪・有罪・準有罪者の割合が一三・七パーセントで、他の地区と比べて厳しかった。このことが結果的に大学教員不足による教育の質の低下を招き、免職教員の復職を順次認める方向に政策を転換せざるを得なくなった。[50] ヘリゲルの場合は、復職することなくガルミッシュ・パルテンキルヒェンで余生を送った。

写真 2　エルランゲンにある旧ヘリゲル邸（2000年著者撮影）

ヘリゲルが一九三〇年ごろにエルランゲンに新築した邸宅は、一九四五年四～五月ころに占領軍によって没収された。旧ヘリゲル邸は、エルランゲンの一等地にいまでも残されていて住人もいる（写真2）。柴田はこのあたりの事情を「第二次大戦に敗れた直後のドイツでは、当時の日本と同じく、勝者のむき出しの力が横行した。ヘリゲルはエルランゲンに新築したばかりの住宅を、突然アメリカ軍に接収され、多数の貴重な財物を掠奪された。中にはかけがえのない日本の思い出の品々、阿波範士から贈られた弓などもあった。ヘリゲルは、すべてを掠奪にまかせて、一九五一年、淡々とした様子でエルランゲンを引き揚げ」[51]たと表現している。

しかし筆者の調査による事実は、少々異なる。エルランゲン大学には、ヘリゲルが邸宅を新築した際に大学から多額の融資を受けたことを示す文書が残されている。したがって占領軍はヘリゲル邸を学長公邸とみなして接収したという見方も可能である。さらにヘリゲル死後の一九五五年に、接収時点にまで遡って邸宅使用料が支払われたことを示す書類が、ハイデルベルク大学にある。それを「掠奪」というのは不適切であろう。また「弁明文」からは彼の処遇を

めぐって占領軍と度重なる折衝が持たれていたことがわかる。柴田がいうように「淡々とした様子でエルランゲンを引き揚げ」たかどうかはわからない。

阿波から贈られ掠奪された弓は、鎌倉の円覚寺に現存する。ヘリゲルの弓が円覚寺に伝存する由来について、櫻井保之助は、邸宅が占領軍に接収された際に弓も掠奪されたが、その後のヘリゲル夫人の努力で奇蹟的に手元に戻ったと述べている。[29] 弓はヘリゲル門人のロートガンゲルから大射道教系の弓道家である円覚寺続灯庵の須原耕雲に託され、日本に里帰りした。また筆者は、ヘリゲルが日本から帰国する際に衆議院議員の木下成太郎（一八六五～一九四二）から贈られた紋付羽織袴と短刀の鞘袋が、ハイデルベルク市内の民俗博物館に保管されているのを見出した。鞘の内袋にはこのような墨書がある。

昭和四年己巳七月十三日独逸国哲学博士並理解再君満任去帝国日本帰共郷尓今雲山万里雖不能久相見帝国淹留中情誼期長不渝為紀念贈日本精神鐘所名工備前吉井住清則刀請諒焉

一九四七年二月九日にヘリゲルがエルランゲンの警察署に提出した書類には、日本の短刀と弓を所持していることが記されている。それが円覚寺伝存の弓と、この鞘袋の中身であった短刀の可能性がある。短刀は一九四五年に占領軍のキンペル少尉によって「使い物にならない」と認定され、所持を許されたものである。残念ながら、一八世紀の作とみられる清則の短刀は、現在行方不明になっている。ヘリゲルはこれらのほかに二振の日本刀も所持していたが、こちらは自宅とともに接収された。弓がいったん接収され、それを取り戻したということを裏付ける資料は見出されていない。これらの事実から、ヘリゲル邸接収にあたっては、占領軍とヘリゲルとの間で交渉があったものと思われる。したがって柴田の解説はあまりに情緒的で、ヘリゲルを悲劇の主人公に仕立てようとする意図が感じられる。

5　おわりに

この論文では多くの未公刊資料を参照しつつ、オイゲン・ヘリゲルの来日前後の活動と、ナチスに関わる消された経歴を明らかにした。明らかにできたことは、つぎの三点に集約できる。

1　ヘリゲルは来日以前にハイデルベルクでおおくの日本人と接触し、禅に関する知識は大峡秀榮と北昤吉から得ていた。

2　ヘリゲルを知る者のなかには、ファウストのように彼の人間性に疑問を投げかける者もいた。

3　ヘリゲルは帰国後ナチスに入党し、エルランゲン大学学長と

して地方政治に関わったことにより、戦後非ナチ化法廷によって罪に問われ、「消極的な同調者」の判決を受けた。

資料の分析をとおして垣間みえたことは、ヘリゲルとナチスの関わりを消そうとする力の存在である。この力は、形を持つ明確なものではない。ヘリゲルを精神的な人としてイメージするのに必要な、暗黙の共通意志のようなものである。あえていうならば、こういった力こそがヘリゲルが『弓と禅』でいった「それ」ではないだろうか。翻訳者や出版者のなかに「それ」が入ってきて、彼らの能力や技量を駆使し、ヘリゲルの人物像をある方向に導いたのだ。

歴史上の安全地帯にいる現代人が、ヘリゲルのナチスへの加担を糾弾することも、当時の状況下ではやむなしとして擁護することもたやすい。実状は、ナチスの地方組織も大学組織も一枚岩ではなく、さまざまな利害関係と意見対立が錯綜していた。そのようななかでヘリゲルが歴史的にどのような役割を果たしたのか具体的に解明するには、さらなる周辺資料の発掘と分析が必要である。

付録「オイゲン・ヘリゲルの弁明文」参考訳[33]

戦争の最後の五ヶ月間、エルランゲン大学学長だったという事実が、わたしをグループII[34]（行動主義者、軍国主義者、受益者）に組み入れようとしている。わたしはこの法的憶測が、わたしには当てはまらないという証明を提出することができる。

I　どのようにしてわたしは学長になったのか

一九四四年の春、すでに二年以上、学長としての職務についている者は交替を覚悟せよ、そして後任に適した者の名をあげよとの告知が、学長たちに発せられた。

当時の学長であったヴィンツ（Wintz）教授は、帝国大臣のルスト（Rust）に私的文書の中でつぎのように報告している（後に彼はわたしに内容について口頭で伝えている）。

ヴィンツは学長としての公務を続行する用意があること、しかしもし彼の六年の在職期間のせいでそれが適切でないならば、六年前から行政の仕事を任されていた今までの副学長――すなわちわたし――のみを後任とすること、この大変な時期に（訳者注・大学の事情を）よく知っている者はほかにいない、という内容であった。

わたしの知る限り、この通達に関してヴィンツ教授への返事はなかった。そして、いままでどおりの状況にとどまるかにみえた。しかし驚いたことに、一一月のはじめにヴィンツ教授の辞任、同時にわたしの学長への就任任命が書かれた一通の指令が帝国文部大臣より届いた。なんとわたしは本来おこなわれるべき大管区大学教官同

盟長（Gaudozentenbundsführer）、中管区長（Kreisleiter）そして大管区長（Gauleiter）による審査なしに任命されたのだ。もし党司令部に打診されていたら、わたしに順番はまわってこなかっただろう。なぜなら、わたしはただの一時的な党員でしかなかったし（党員証なし）[35]、そのうえ当時の大管区大学教官同盟長H・A・モリトリス（Molitoris）博士と仲が悪かったからである。彼はヴィンツ学長のもとでのわたしの副学長としての職務を解こうと、何度も試みていた。

わたしはいろいろと口実をつけて、この任命を断ることができただろう。しかしもしそうすれば、大管区大学教官同盟長と中管区長のいいなりになる者が学長に就任しただろう。もしそうなっていれば、大学にとってたいへん都合の悪い結果になるということは、わたしのながい経験からわかりきっていた。これを防ぐためにも、わたしはこの希望のもてない状況で学長ポストを承諾することを義務と思い、そして大学の存在を危険に晒すかもしれないすべてのことを寄せ付けまいと強く心に決めた（添付書類一一を参照）[36]。わたしのように戦時に副学長であった者は、ドイツが遅かれ早かれ悲劇的な結末に追い込まれようとしていたこの時期、名誉と認知の引き替えとなるものは努力・労働そしてつらい失望のみしかないという事実から、もはや名誉欲あるいは顕揚欲を満たすために学長になりたいと思うことはできなかったのだ。

II　どのようにしてわたしは学長としての職を務めたか

（一九四四年一一月一九日から一九四五年四月一六日まで）

1　わたしが学長になるやいなや、中管区長のグロス（Gross）は大学教授の長衣を紡糸原料収集へ引き渡すようわたしに求めた。彼はわたしにほとんど一日おきにこの用件で電話をしてきた。それどころかわたしに働きかけるように中管区婦人団長（Kreisfrauenschaftsleiterin）をそそのかし、そのうえ以前学長だったある者が、大学教授の「くだらない」長衣を捧げることは義務であるとしつこくいってきた。他の大学の学長たちはそうこうするうちに「良い」例として長衣を引き渡したが、わたしはいいなりにならなかった。だから大学は今日まで長衣を所有している。

2　一九四四年一二月、大管区指導部（Gauleitung）は約三〇〇〇人のザールランドからの難民をエルランゲンに宿営させなければならないとわたしに通達してきた。そのためには学生寮のほとんどを使用する以外、方法はなかった。わたしは会議の場で大管区指導部の申し合わせによる大学閉鎖を意味するこの計画に断固として抵抗した。エルランゲン宿舎の難民への割り当てを阻止することに、わたしは成功した。

3　一九四五年一月のニュルンベルクのたいへんな爆撃の後、大管区指導部は爆撃で焼け出された約二五〇〇人分の避難場所の工面

をふたたび要求してきた。大学はまたもや難民により閉鎖しなければならないという危険に晒されていた。わたしはニュルンベルクでふたたび異議を申し立て、そのおかげでエルランゲン大学はドイツのなかでもたいへん数少ない、まったく無傷の大学といわれる成功を収めた。しかしそのためにわたしは、「このたいへんな苦難の時期に、同人種に対して心ないインテリだ」という侮辱的で失礼な批判を受けなければならなかった。

4　最後に、エルランゲンはシュレージェンからの約三〇〇〇人の難民を受け入れることを要求された。このとき大管区指導部はわたしに問い合わせることをせず、事情によりエルランゲンをもうこれ以上、保護しておくことはできないとだけ伝えてきた。わたしは、つぎつぎと押し寄せる難民に対する指導権を持っている全権委任者にベルリンで異議を申し立てるべく、市長のオーリー（Ohly）博士とわたしがそれぞれ作成した二通の詳細な報告書を証拠書類として渡してくれるよう、ヴォルツ（Volz）教授（自然科学部）に頼むしかもはや方法がなかった。ヴォルツ教授は命令を持って帰ってきた。それはエルランゲンの町と大学を使用せず、大管区長の地区で難民を受け入れるようにという内容だった。それによって大管区長は布告を撤回した。

そのころから、大管区指導部がわたしのことを嫌っていたのはわかっていた。そんなことは、わたしにとってはどうでもよいことだった。大事なのはわたしが大学をたいへんな被害から守ったということである。

項目2から4の証人として、以下の名をあげることができる。当時の市長・オーリー博士、ヴォルツ教授、そして当時の学生住宅局長であったH・モエスナー（Moessber）氏。

5　二月の終わり頃、当時のエルランゲン民兵（Volkssturms）の部隊指揮官であった陸軍中佐ハンス・リッター・フォン・シュミット（Hans Ritter von Schmidt）がわたしをたずねてきて、ふたりで（わたしたちは表面的にしか知らなかったので、さしあたってはとても注意深く）状況を話し合った。彼の詳細な説明によると、民兵は攻撃されたときに持ちこたえられるほど十分な武装態勢にはなかった。その機会に彼は、命じられているエルランゲン防衛について、わたしが学長としてどう考えるか知りたがった。わたしは野戦病院と大学付属病院にいる八～九〇〇〇人の怪我人や病人のことを考慮に入れなければならない一方で、原則的には大学都市としてのエルランゲンの全面防衛には反対であると答えた。フォン・シュミット氏はそれに対して、このわたしの見解を司令部上役に対して伝えてもよいかどうか尋ねたので、わたしはためらうことなく承諾した。

二、三週間後の二度目の会合でフォン・シュミット氏は、上層部はエルランゲン防衛についてはまったく考えていないようだったが、中管区長のグロスはエルランゲンをどんなことがあっても堅く守る

ことを主張しているようだとわたしに説明した。それに対してわたしはフォン・シュミット氏に、万一の場合、中管区長を無力化する、すなわち「倒す」ために動いてくれる何人かの信用できる男たちがいるかどうか尋ねた。フォン・シュミット氏はこれが可能であると信じていた。そうすることがこの局面の唯一の正当な打開策と思えたからである。

四月の三度目の相談でわたしたちは、ヒトラー青年団（Hitler-jugend）側が武器と爆薬を所有している場合の危険性について討議した。

この最後の会合の三日後、フォン・シュミット氏は秘密国家警察（Gestapo）に逮捕され、短い審理の後、死刑判決を受けた。どうやって彼が処刑の最後の瞬間を免れたか、これに関しては説明できない。

わたしはアメリカ軍がすでにエルランゲンの市門の前に立っていた最後の瞬間に町の防衛反対を唱えたのではなく、すでに何週間も前からいっていたのだ。そして町が占領される以前にわたしの腹が知れた場合、その結果どういう運命にさらされるか、わたしにははっきりとわかっていた。

証人、フォン・シュミット氏（添付書類一六を参照）。

これに関してわたしはもうすこし言及したい。というのは、わたしは戦争の最後の月にはじめてヒトラーの第三帝国が終わりに近づいていると固く信じて疑わなかったのではなく、あるひとりの女子学生がわたしを訪ねて来たときに「ともかく待ちましょう、すべてが変わると思います」とわたしがいっていたように、もう何年も前からそうなることを信じていた（添付書類八を参照）。

実際、わたしは「行動主義者（Aktivist）」であったが、ヒトラー賛成派ではなく反対派だった。

最後にもうひとつ強調しておく。わたしは学長職についている間、公式にも非公式にも集会を行わなかった。まったく意図的だった！そうでなければわたしの本当の心情と計画を隠すために、集会ではナチの美辞麗句を使って不自然な態度をとることを余儀なくされただろう。

フォン・シュミット氏とわたしの危険な話し合いからは、不都合なことはおこらなかった。しかし仮にアメリカ軍によるエルランゲン占領がなにかの理由で何週間か延びていたら、わたしの身に何が起こっていたか、誰にも分からない。わたしの心の内を隠しておくことは、そうながくはできなかったからだ。

III　戦争最後の何ヶ月間かの学長としてのわたしの態度は、一九三三から四五年までのわたしの全般的態度と一致する

1　わたしは志願して入党したのではなく、三七年秋に要請されたのだ。わたしは入党を拒否できたのだが、そうしなかった。なぜ

なら、三六年からわたしは哲学部の学部長であったし、エルランゲン大学と当時の大管区長であったシュトライヒャー（Streicher）の間は、たいへん緊張した状態であったからだ。また、わたしは二九年から正教授だったので、入党によるわたしの職務上の地位の「改善」は期待できなかったということもあって、わたしにとって（入党は）どうでもよいことだったが、もしわたしが拒否していた場合、大学にとって非常に都合の悪い結果になっていただろう。バイエルンの三つ目の大学を閉めるという計画は、依然としてくすぶっていた。わたしは副学長のときから、この計画を阻止すること、そして大学の存続を確実にすることにどれだけ骨が折れるかということを、知りすぎるぐらい知っていた。

わが家ではどのような心情が支配的だったかというと、まずわたしの妻がナチ党のいかなる組織にも属さなかったこと、そしてまた一度たりとも（訳者注・ナチスと）かかわらなかったという事実からあきらかである。彼女は副学長の妻だということでたびたび入党を要請されたが、断固として、そしてわたしの同意によって、まちがいなく誘いを断った。

2　世界を極東の内側まで知ったひとりの者として、わたしは人種差別イデオロギーと、とりわけ人種間の憎しみを原則的になくさなければならないことを、自分自身よくわかっている。

これらは以下にあげることに示されている。

a　一九三〇年からわたしの家庭医は、彼が急遽ウイーンへ移住するまでユダヤ人のモセ（Mose）医師（ヒンデンブルグ通り六一／二）であった。

b　また三四年一月、アロン・コーン（Aron Cohn）という名前のひとりのユダヤ人学生に学位授与を許可し、彼に最高点成績「優秀」を与えた（学部の学位授与者名簿を参照）。

c　一九四二年、血統のために前線勤務から解雇されたフレンケル（Frankel）という名前のひとりの一親等ユダヤ人混血人に、規定に反しているにもかかわらず自己責任で彼に学生許可を与え、それ以外にも五〇〇ライヒスマルクを用立てた（添付書類一を参照）。

d　厳しい規定にもかかわらず、ユダヤ人哲学者の本を一冊たりとも哲学ゼミの図書館から取り除かなかった（添付書類三を参照）。

e　講義と演習中は、ユダヤ人哲学者の教えはユダヤ人以外の哲学者のものと同じように認められていたし、詳細に扱われていた（添付書類二、三、五、七を参照）。

f　試験記載から証明することができるように、国家試験で質問を義務づけられていたナチ世界観の審査をせず、以前のように哲学の歴史についてのみ試験をおこなった（添付書類三を参照）。

3　わたしの講義と演習中、わたしは客観的な立場にいることに努め、ナチのイデオロギーにはすこしも居場所と感化の余地を与えなかった（添付書類二、三、五、七、八、一七、二一、二三、二八を参照）。またわたしは日本と東アジアについての講義と講演を、わたしの知識を使って一度も、それどころかすこしたりともナチの普及のために利用しなかった（添付書類三、五、九を参照）。

4　副学長として、また学長として、わたしの決断は一度たりとも役人や勤労者たちがもつ政治的態度によって影響されなかった（添付書類二、四、一一、一二、一三を参照）。

a　たとえば、ブレナー（Brenner）教授が英文学科の代表を任されたことに中管区長が反対しているにもかかわらず、支持した（添付書類一〇を参照）。

b　おなじ意味で、わたしはあたらしい大学教官規則のなかで、大管区大学教官同盟長H・A・モリトリス博士が受け入れを拒否したR・ツォッカー（Zocher）教授の面倒をみた（添付書類一二を参照）。

c　おなじく、わたしは彼が政治上「がまんならない（untragbar）」とみなされていることを知っていたにもかかわらず（彼の文書で証明されているように）、とても有能な暖房係のヒンツ（Hintz）を職場長に昇進させることを提案した（添付書類四を参照）。

d　反対に、わたしは当時の参謀部リーダーであったクライン（Klein）がバイエルン文部省で断固として支持していたひとりの大学教官の受け入れを拒んだ。彼の能力は教える側として十分なものではなかった（添付書類一二を参照）。

5　わたしは役人、勤労者そして学生たちにいつでも自由に意見表明することを当然のこととして認めていた。そして反ファシズム的・敗北主義的な態度にわたしが気づいても、それをはねつけたり告発したりすることがわたしの義務であったにもかかわらず、そうはしなかった。

6　わたしの六年間の副学長としての勤務中、報酬として一ペニヒさえも受け取らなかったことを、わたしは証明できる。出張の立替分だけは、法律上の規則にのっとって支払わせた。請求することができたかもしれない出張中の個人的な出費に関しては、自分の懐から支払った。

わたしは学長として他の大学長同様、所要経費のみ受け取り、それ以外には贈与など、ましてや党からはまったく受け取ってはいない。

Ⅳ　占領軍政府との共同作業

エルランゲンが占領された後、わたしは学長として占領軍政府と連絡をとりはじめた。わたしは最初、すぐにふたつの尋問を受けた。

ひとつは憲兵から簡単に、そしてもうひとつは当時の司令官だったアデイル（Adair）少佐から徹底的に受けた。占領軍政府が次第に感じ取ったわたしの印象は、彼らの指図への対応と信頼できるという雰囲気作りの努力によって、あきらかに疑いのないものになっていった。彼らはわたしに三度目の尋問をした。それは総司令部のたかい地位にあるふたりの将校によってアデイル少佐の勤務室で行われ、立会人はキンペル（Kimpel）少尉だった。この尋問は二時間半かかった。

結果は、占領軍政府の命令により四五年五月三一日付で副学長に任命され、そして管理部の処理を任された（添付書類一四を参照）。そのようにしてわたしは、あたらしい学長と副学長が任命されるまで、正確には四五年一二月五日まで占領軍政府と仕事をした。そして軍規定五一号あるいは八号から、もはやこれ以上延期されることのない免官を受けるときがやってきた。エルランゲンの占領軍政府の上部に対しての申請、つまりわたしの尋問の結果を考慮して、規定に反してはいるがわたしに副学長ポストを与えておくことに関してキンペル少尉がわたしに説明したところによると、まだ決定は下されていないということだった。そういうことで、わたしは大学を去らなければならなかった。

またキンペル少尉の後任、ルンデーン（Lundeen）少佐がわたしの件を引き受けたいといったことは、わたしに希望を抱かせた。占領軍政府はわたしの学長職解雇告知をした関係で、わたしの件について処置を取ると伝えてきた（添付書類一五を参照）。ルンデーン少佐の考えでは、わたしのことに関しては四六年の夏ゼミがはじまる前には片づいているだろうということだった。

三月にわたしが最後に彼を訪れた際、彼はこの件に関してのすべての処理は原則的にドイツ政府に引き渡されたようなので、残念ながら占領軍政府はわたしのために何もできないだろうとわたしに伝えた。

四六年一〇月一四日、キンペル少尉は旅の途中でエルランゲンに立ち寄り、わたしを軍司令部に来させてわたしの境遇について尋ねた。彼は、わたしのことは特例であり、実質的にではなく機械的に五一号あるいは八号規定を適用したのだと、確信をもっていった。

掲載許諾　Universitätarchiv Heridelberg

（翻訳・前田泉、校閲・山田奨治）

謝辞

本論文で参照した未公刊資料の所蔵者は、つぎのとおりである。

・Archiv der Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nurenberg

・Bundesarchiv, Berlin

・Universitätarchiv Heridelberg
・Völkerkundemuseum der von Porheim - Stiftung Heidelberg
資料調査にあたっては、秋沢美枝子、William Bodiford、稲賀繁美、前田泉、Wolfgang Schamoni、Paul Swanson（アルファベット順）の各氏よりご助言・ご協力をいただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

注

本文中の引用の表記は、原則として常用漢字に準拠した。

（1）オイゲン・ヘリゲル（稲富栄次郎、上田武訳）『弓と禅』協同出版　一九五六年。（Herrigel, E.: Zen in der Kunst des Bogenschiessens, Otto Wilhelm Barth-Verlag, 1948.）

（2）山田奨治「神話としての弓と禅」日本研究　第一九集　一九九九年　一五〜三四頁。その後の研究成果を補注として追加した英訳に、YAMADA, S.: The Myth of Zen in the Art of Archery, Japanese Journal of Religious Studies, 28/1-2, pp. 1-30, 2001がある。また、私家版によるイタリア語訳Yamada, S. (tr. Comello, L. and Iwata, E.): Il mito dello zen nell' arte del tiro con l'arco, Takenoko Kyudo Club Padoma, Italy, 2001もある。

（3）Gulberg, N.: Eugen Herrigels Wirken als Philosophischer Lehrer in Japan, *Waseda-Blätter*, No.4, pp.41-66, 1997; No.5, pp. 44-60, 1998.

（4）Scholem, G.: Zen-Nazism?, *Encounter*, 16(2), p.96, 1961.

（5）Needham, R.: *Exemplars*, University of California Press, p.13, 1985.

（6）An interview with R. J. Zwi Werblowsky: ZEN, *The Center Magazine*, March/April, pp.61-70, 1975.

（7）オイゲン・ヘリゲル（柴田治三郎訳）「新版への訳者後記」『日本の弓術』岩波文庫　一九八二年　一一七頁。

（8）グスティ（Gusty）とする表記もあり。

（9）ハイデルベルク大学には、ヘリゲルの未公刊資料がおおく残っている。その理由は、ヘリゲルの妹・エルザの長男であるディートリヒ・ショッパー（Dietlich Shopfer　一九一四〜）が一九九三年に、ヘリゲル家の家族歴に関する資料をハイデルベルク大学に寄贈したためである。ヘリゲルはショッパーの「教父」にあたり、親族のなかでもとりわけ深い関係にあったため、遺品の一部が渡されたとみられる。

（10）"Das neue Denken," Schneider, 1927., "Zwischen Frage und Antwort: Gedanken zur Kulturkrise," Schneider, 1930.の著者であるヘルマン・ヘリゲル（Hermann Herrigel　一八八八〜一九七三）は、オイゲンの兄ではなく父方の従兄弟にあたる。

（11）Herrigel, O.: Erzahlungen, Heidelberg, 1898?.

（12）哲学者、慶應義塾大学教授。

（13）哲学者、東北大学学長。

（14）務台理作「留学時代の高橋里美さん」『思索と観察』勁草書房　一九六八年　一七〇〜一七九頁。

（15）Thoma, A: Hilfsbuch zur Behandlung der Biblischen Ges-

chichte, Zweite neubearbeitete Anflage von Oskar Herrigel, Konkordia A.G. Druck und Verlag, Bühl/Baden, 1927.序文にオスカーの文章がある。

(16) Humpf, G. and Lepointe, E.: Etudes Francaises, Teil 2, Verlag und Druck von B.G.Teubner in Leipzig und Berlin, 1929. (E. Lepointeがヒンマ・ヘリゲル)

(17) Ohasama, S. and Faust, A.: Zen: Der lebendige Buddihismus in Japan, Verlag Friedlich Andreas Perthes, 1925.

(18) Herrigel, E.: Die Aufgabe der Philosophie im neuen Reich, *Pfälzische Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaften*, pp.26-32, 1934.

(19) Herrigel, E.: Nationalsozialismus und Philosophie, 1935.

(20) Herrigel, E.: Die Tradition im japanischen Volks- und Kulturleben, *Kulturmacht Japan*, pp.14-15, 1941.

(21) Herrigel, E.: Das Ethos des Samurai, *Feldpostbriefe der Philosophischen Fakultät*, Nr.3, Friedrich-Alexander-Universität Erlangen, pp.2-14, 1944.

(22) グスティ・ヘリゲル（稲富栄次郎、上田武訳）『生花の道』福村書店　一九六一年。(Herrigel, G. L.: Der Blumenweg, Otto Wilhelm Barth, 1958.)

(23) 柴田前掲書、一一四頁。

(24) キリスト教史学者、東京女子大学学長。

(25) オイゲン・ヘリゲル（榎木真吉訳）『禅の道』講談社学術文庫　一九九一年。(Herrigel, E.: Der Zen-Weg, Otto-Wilhelm-Barth-Verlag, 1958.)

(26) 哲学者、獨協大学学長。

(27) 哲学者、政治家、大東文化学院教授、衆議院議員。北一輝（一八八三～一九三七）の実弟。

(28) 哲学者、評論家、思想家、法政大学教授。

(29) 『三木清全集』第一巻　岩波書店　一九六六年　四一二頁。

(30) 三木前掲書、四一六～四一七頁。

(31) 哲学者、美学者、東北帝国大学教授。

(32) 経済学者、東京帝国大学教授、法政大学総長。

(33) 経済学者、法政大学教授、大原社会問題研究所研究員。

(34) 経済史学者、京都帝国大学教授、岡山大学学長。

(35) 宗教学者、哲学者、東北帝国大学教授。

(36) ドイツ文学者、随筆家、劇作家、京都帝国大学教授。

(37) 北昤吉『哲学行脚』新潮社　一九二六年　三一九頁。

(38) 石原謙「ハイデルベルク大学の想ひ出」理想　第八七号　一九三八年　二五～三二頁。

(39) エルンスト・ベンツ（柴田健策、榎木真吉訳）『禅　東から西へ』春秋社　一九八四年　九八～九九頁。(Benz, E.: Zen in westlicher Sicht, O.W. Barth-Verl. 1962.)

(40) Glockner, H.: Heidelberger Bilderbuch, H. Bouvier u. CO. Verlag, pp.221-245, 1969.本文中の引用は、秋沢美枝子の私訳をもとにしている。

(41) 天野貞祐「ハイデルベルク学派の人々」理想　第八七号　一九二七年　三九頁。

(42) Sharf, R.: The Zen of Japanese Nationalism, *History of Religions*, Vol.33, No.1, pp287-296, 1993.

(43) ベンツ前掲書、一一頁。

(44) 北前掲書、三一五頁。

(45) 北前掲書、六九～七四頁。

(46) オイゲン・ヘリゲル（柴田治三郎訳）『日本の弓術』岩波文庫 一九八二年 二四頁。(Herrigel, E.: Die ritterliche Kunst des Bogenschiessens, *Nippon, Zeichtschrift fur Japanologie*, 2/4, pp. 193-212, 1936.)

(47) 北前掲書、三二〇頁。

(48) 山本尤『ナチズムと大学』中公新書 一九八五年 三一頁。

(49) ヴィクトル・ファリアス（山本尤訳）『ハイデガーとナチズム』名古屋大学出版会 一九九〇年 三〇〇頁。

(50) 山本前掲書、一七六～一七八頁。

(51) 柴田前掲書、一一六～一一七頁。

(52) 櫻井保之助『阿波研造 大いなる射の道の教え』阿波研造先生生誕百年祭実行委員会 一九八一年 三〇一頁

(53) 原文書では冒頭に「非ナチ化」(Entnazifizierung) と筆記されているほかにタイトルらしいものがない。ここでは仮にこのようなタイトルを付した。執筆時期は、付属文書の日付から一九四七年三～一一月の間と推定できる。また校閲者は近現代ドイツ史を専門とする者ではないため、訳文には不適切な訳語や解釈が残っている可能性がある。よってこの翻訳は参考訳という位置づけにした。

(54) ドイツにおける戦犯の分類区分。

(55) 本文でも述べたように、ヘリゲルの弁明に反して彼のナチ党員証の写しが伝存している。

(56) 原文書には、ヘリゲルの弁明を裏付ける二一名の証言者（うち一名分が欠落）による署名入り証言書が添付されている。「添付書類」はその証言書を指す。